

令和4年度

日本遺産「鮭の聖地」の物語～根室海峡一万年の道程～構成文化財調査事業

旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋 実測調査報告書

令和5年6月

鮭の聖地メナシネットワーク・別海町教育委員会

はじめに	1
1. 調査目的	
2. 調査概要	
(1) 調査員の構成	
(2) 主な役割分担	
I 旧開拓使別海缶詰所	3
1. 沿革	3
2. 建築概要	4
2-1. 各時代における建築概要の変遷	
(1) 缶詰所時代	
(2) 中学校々舎時代	
(3) 漁協倉庫時代	
2-2. 現状	
(1) 構造規模	
(2) 外観	
(3) 内観	
(4) 保存状態	
3. まとめ	11
参考文献	
図版出典	
図面資料 旧開拓使別海缶詰所	12
II 旧奥行臼駅本屋	19
1. 沿革	19
2. 建築概要	19
2-1. 配置	
2-2. 構造規模	
2-3. 外観	
2-4. 内観	
3. 保存状態と修理工事へ向けた課題	25
3-1. 保存状態	
(1) 外部	
(2) 内部	
(3) その他	
3-2. 修理工事へ向けた課題	
(1) 建具類について	
(2) 壁仕上げについて	
(3) その他	
4. まとめ	29

参考文献
図版出典

図面資料 旧奥行臼駅本屋31

おわりに37

はじめに

1. 調査目的

本稿は、鮭の聖地メナシネットワークからの依頼を受け令和4年度に実施した、別海町歴史文化遺産 旧開拓使別海缶詰所、および別海町指定有形文化財 奥行臼駅の現地調査について、その概要を2部構成で報告するものである。調査の目的は縮尺 1/100 の平面図、断面図、および立面図を得ることであり、その成果品として各部の末尾に図面資料を添付した。なお、旧奥行臼駅での調査対象は調査期間の都合上、本屋のみとした。

本調査に至ったきっかけは、「鮭の聖地」の物語 ～根室海峡一万年の道程～ の日本遺産認定にある(注記1)。日本遺産の認定は文化庁が推進する事業の一つで、地域の活性化を図ることを目的としている。調査対象の旧開拓使別海缶詰所と旧奥行臼駅は、上記物語の中において構成文化財(注記2)として位置付けられているものの、両建築の活用に必要な 1/100 程度の各種図面を欠いている状態が長らく続いていた。

2. 調査概要

旧開拓使別海缶詰所(図1)と旧奥行臼駅本屋(図2)の調査期間は、前者が2022(令和4)年8月22日(月)から8月25日(木)まで、後者が8月30日(火)から9月2日(金)までの合計8日間である。両期間とも、縮尺 1/100 の平面図、断面図、立面図の作成に必要な箇所の実測と写真撮影を行なった。調査員の構成、および役割分担を以下に記す。

(1) 調査員の構成 (○：調査責任者)

○ 西澤 岳夫	釧路工業高等専門学校	創造工学科	建築デザインコース	建築学分野	教授
平澤 宙之	釧路工業高等専門学校	創造工学科	建築デザインコース	建築学分野	助教
半藤伊武起	釧路工業高等専門学校	建設・生産システム専攻			1年
増田悠一郎	釧路工業高等専門学校	建設・生産システム専攻			1年
小椋 悠加	釧路工業高等専門学校	創造工学科	建築デザインコース	建築学分野	5年
					合計5名

(2) 主な役割分担

西澤：旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋の実測調査と写真撮影。

実測図の作成、および本報告書の執筆。

平澤：旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋の実測調査と写真撮影。

半藤：旧開拓使別海缶詰所、および旧奥行臼駅本屋の実測調査と写真撮影。

増田：旧奥行臼駅本屋の実測調査。

小椋：旧奥行臼駅本屋の実測調査。

※主要使用機材：レーザー距離計(leica DISTO D810、BOSCH GLM 7000)、コンベックス



図1 旧開拓使別海缶詰所(現別海漁業協同組合倉庫)
撮影：西澤岳夫 撮影年月日：2022年8月22日



図2 旧奥行臼駅本屋
撮影：西澤岳夫 撮影年月日：2005年5月1日

注記

- (1) 文化庁はホームページ(<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/index.html>)のなかで、地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援する、と明記している。標津町、根室市、別海町、羅臼町の4市町は、“「鮭の聖地」の物語 ～根室海峡一万年の道程～」のストーリーを共同で文化庁に申請し、2020年6月に同庁より日本遺産の認定を受けた。文化庁のホームページでは、日本遺産に認定された各ストーリーの申請内容を公開している。4市町が共同で提出した申請書「様式 1-1」に記載されているストーリーの概要を、参考までに以下に転載する。

「北海道最東の海、根室海峡。この地では、遥か一万年の昔から、絶えず人々の暮らしが続いてきました。その支えとなったのは、大地と海を往来し、あらゆる生命の糧となった鮭です。毎年秋に繰り返される鮭の遡上という自然の摂理の下、当地では人と自然、文化と文化の共生と衝突が起こり、数々の物語と共に、海路、陸路、鉄路、道路という、根室海峡に続く「道」が生まれます。一万年に及ぶ時の流れの中で、鮭に笑い鮭に泣いた根室海峡沿岸。ここはいつも、人と自然、あらゆるものが鮭とつながる「鮭の聖地」です。」

- (2) 前掲申請書「様式 3-1」によれば、旧開拓使別海缶詰所と旧奥行臼駅のストーリーの中の位置付けは、表1のようになっている。なお、旧奥行臼駅本屋を含む下記標津線関連資産群は、現在別海町において策定中の「奥行臼史跡公園整備基本計画」においても、旧奥行臼駅通所、旧別海村営軌道風連線奥行臼停留所とともに、主要な構成要素として位置付けられている。

表1 ストーリーの構成文化財一覧表（前掲文化庁ホームページより一部抜粋 ルビ、注記は省略した）

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
～略～				
3. 幕末会津藩士が育てた産業の灯火				
～略～				
19	旧 開拓使別海缶詰所	町登録 歴史文化遺産 (建造物)	「蝦夷地」から「北海道」に改まった後の明治 11 年、和人の定着と外貨獲得を目的に、北海道開拓使によって西別川河口に設置され、根室地方の近代的水産加工業の先駆けとなった産業遺産。この工場はやがて当時の有力資本家の一人藤野家に譲渡される。国後島を含め、根室海峡沿岸地域では、藤野家の他、碓氷、和泉など多くの資本家によって缶詰工場が開設され、明治 20 年代までに水産業のまちは隆盛を極めた。根室振興局により北方領土遺産として選定されている。	北海道 別海町
～略～				
4. 鮭の物語は大地へと続く				
～略～				
28	標津線関連資産群	町指定 史跡 (28-1) 有形文化財 (建造物) (28-2)	根釧台地の内陸開拓を大きく進展させ、酪農景観の誕生を強力に後押しした開拓路線標津線の歴史を物語る内陸交通遺産。また鮭不漁期に冷凍車両を導入したことで、新巻鮭の販路を東京まで切り拓き、高付加価値をつけて販売できたことで、漁業者の暮らしも支えた。現在は始終着駅根室標津駅の歴史を物語る「旧根室標津駅転車台」(28-1)、現存する唯一の標津線駅舎「奥行臼駅」(28-2)が残されている。	北海道 別海町・標津町
～略～				

※上記一覧記載の文化財の番号は1から31までであり、「世界に開かれた野付半島と人々を魅了し続けた鮭」、「鮭に支えられ一万年」、「幕末会津藩士が育てた産業の灯火」、「鮭の物語は大地へと続く」の4つの項目に分類されている。